

2012年 6月16日・「図書新聞」では

批評の背後に長い年月をかけた

確かな実証が存在する

逸見猶吉の真の心を凝視し、心血を注いで書き上げた労作

尾崎寿一郎 評論集『詩人 逸見猶吉』 北川惣次

「逸見猶吉という詩人がいた。無頼で酒飲みで漢であった」本書冒頭の文章である。「漢」には「おとこ」と読みがなが付けられている。本書を読んで、この著者はおのれの指を切り、そのしたたり落ちる血で書きついでいったのではないかという、すさまじい印象を受けた。

本書は、第一部 ウルトラマリンの世界（序章 逸見猶吉と根室・第一章 「兇牙利」とは何か・第二章 谷中村と鉾毒事件・第三章 内面のドラマの火・第四章 ウルトラマリン・第五章 牙のある肖像）、第二部 火檻樓篇（第一章 満州に渡るまで・第二章 満州文学と日支事変・第三章 戦争協賛詩と大東亜戦争）、補遺（川村湊の逸見猶吉批評・田中正造の「辛酸亦入佳境」）という構成。

本書の著者は、逸見が昭和三年に滞在した根室の町へ行き、逸見関連の場所、ゆかりの人を尋ね歩いている。本書の強みは批評の背後に長い歳月をかけた確かな実証が存在することだ。尾崎は「逸見の暗喩を読むには、逸見の心境と時代状況に迫らなければ鍵は得られない」と述べる。逸見詩の中の「兇牙利的」を「荒々しい獸的反抗心」と説く。「兇牙利」とは、憑依現象のことで、谷中村鉾毒事件を知った「うっ屈するコンプレックスと、権力・軍国主義に対する憤り」が、「兇牙利」の「憑依現象」を生んだのだ、と説く。そして「詩と詩論」の落書で「匈牙利」から「兇牙利」を導き出したと推論する。「谷中村と鉾毒事件」は、権力者側に立ち向かう田中正造の「公怒」が圧巻。谷中村事件を詳細に記したのは、「逸見詩に籠るやり切れなさ」と痛憤を知る「ためであるという。

心に残る言葉も多々存在する。「強い詩とは、不逞な精神の牙をかざす兇牙利の跳梁する詩である」・「書く行為は、自分を律し意志し方向づけることである」・「真理や正義は、いつの時代も権力がからむ」等々である。

逸見猶吉という筆名の由来を説くところなど、歴史の謎解きを知るときに似て、緊迫感が漂う。そこに辿り着いた著者の感動も行間に滲み出る。猶吉一族の調査も詳細を極める。

徹底的に追跡した結果、尾崎が下す結論が鋭い。「ウルトラマリン」は「逸見の冥界であり無意識野でもあるだろう」と推定し、詩「ベエリング」に記されていた「親愛の人C・Bに」の「C・B」をシャルル・ボードレーであることを「確信」したと述べる。

緒方昇・木山捷平・草野心平・檀一雄など多くの文壇人の登場は、逸見を軸とするひとつの文壇側面史を形成している。親友である草野と逸見の「喧嘩の種」の推測、「逸見の抱く雲は探検家の夢であった」という言葉も心に残る。

北海道さすらいの理由、カタカナ表記からひらかな表記移行の意味、兇牙利との訣別……尾崎はそれらの真相を次々と解明してゆく。本書の見事さは、逸見の詩・エッセイに対する読みの深さにある。

尾崎は、過去、逸見の〈詩意〉を理解する人がいなかったことを慨嘆しているが、本書で、逸見の〈詩意〉、〈真意〉（本当の心）が理解されたことをだれよりも喜んでいるのは、泉下の逸見猶吉自身であろう。本書を読んで、逸見猶吉詩の一語々々がいかに重く、深い意味を持っているか、そのことを思い知らされた。歯切れのいい文章も小気味よい。

昭和十三年、逸見が東京に戻ったとき、友人たちが設営した歓迎会に行かなかったことについて、長女の一周忌、小児麻痺の次女との巡り会いなど、「華やぐ気持になれなかったのでは」と推測する。第二部末尾の逸見の死の場面は、彼が精一杯生きた〈漢〉であっただけに、涙を誘う。尾崎の「逸見はぎりぎりまでよく闘った」という言葉は、逸見に対する深い鎮魂の思いを示している。尾崎寿一郎もまた〈漢〉であった。

鈴木比佐雄は「栞解説文」で、尾崎に「逸見の魂が乗り移ったかのような凄みの余韻を感じ」たと述べているが、まさにその通りである。「自由保持のアナーキズムで単独行を生きる」詩人逸見猶吉の真の心を凝視し、心血を注いで書き上げた労作である。（日本文学研究者）

と紹介されています。